

Title	貸出利子率決定の諸要因
Sub Title	
Author	益満佳和(Masumitsu, Yoshikazu) 村井俊雄
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1981
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001981-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 益 満 佳 和 主査 村 井 俊 雄 教授
(株式会社 三菱銀行) 副査 柴 田 典 男 助教授
所属ゼミナール 村 井 俊 雄 研 青 井 倫 一 助教授

貸出利子率決定の諸要因

負債利子率の決定要因としては、欧米の書を開くとき、倒産リスクで始まり倒産リスクで終わっている感が否めない。ここでは負債を銀行借入に限定し、わが国の銀行の貸出利子率が何の関数として定まっているのかについて、仮説を構築し、回帰モデルによってそれを検証しようと試みた。

利子率が倒産リスクの関数であるとする場合、投資家は、投資から得られるであろう期待収益を、約定金利と、無事に元利金が回収できるであろう確率との積である確率変数とみなしていることになる。つまり、回収出来ないかもしれないリスクを、利子率を高くすることによってカバーしているのだ。日本の銀行の場合、こうした考えは当たらない。我々は倒産リスクを担保によってカバー可能なのだ。(仮説1)

次に貸出利子率は、銀行が一方的に何らかの基準でもって決めてしまうという考え方が巷間みられる。しかし、銀行取引を基本的に相対取引と考える方がベターであれば、金利も企業と銀行の交渉が重要な要因となるはずである。銀行との交渉の場において、如何なる要因が整えば、企業の交渉力が大きなものとなるのであろうか。(仮説2)

検証は一部上場企業55社について、昭和52年～昭和55年の3年間及び昭和45年～昭和48年の3年間に行ない、被説明変数としては、表面金利ではなく、企業の適用金利とプライムレートの乖離幅(固有利子率)をとった。検証の結果、仮説1は棄却されず、仮説2での最も重要な要因は、上位2行の貸出残高の差であった。銀行間の価格競争が窺われる。